ユリシーズ第18挿話の考察

2022.6.26.ぬしろかずや

第18挿話のトピック

・なぜ句読点がない語りが用いられるか

・解放者としてのモリー

・なぜ最後の挿話の語り手が女性なのか

・『yes』の意味するものは

第18挿話の語り・内容はこれまでの挿話と比較してもかなり特異なものである。
これまでの挿話との関係性を見ることでその内容を考察する。

第18挿話のトピック

・なぜ句読点がない語りが用いられるか

・解放者としてのモリー

・なぜ最後の挿話の語り手が女性なのか

・『yes』の意味するものは

句読点のないモリーの語りを第3挿話、第13挿話と比較して考える。

なぜ句読点のない語りが用いられるか　-第3挿話との比較-

■第3挿話との比較 -内的独白に見る男と女の語りの違い-

・第3挿話はスティーブンによる男の独白により語られ、第18挿話はモリーによる女の独白により語られる。

・スティーブンの語りは抽象的・観念的であるのに対し、モリーの語りは具体的・肉体的である。

・スティーブンは浜辺を歩き、そこで目に付く(外側の)対象を媒介として思考する。
モリーは1日中家におり、自らの記憶や肉体といった(内側の)対象を媒介として思考する。

・スティーブンは思考をその都度区切り、考える対象を明確化することで自問自答する。
モリーの語りでは人物や出来事が区切られることなく、意識の中を脈絡もなく通り過ぎていく。

これら内的独白の差異に男女の思考の違いを見て取れる。

なぜ句読点のない語りが用いられるか　-第13挿話との比較-

■第13挿話との比較　－２つの女性の語りの比較-

・ガーティの語りは女性向けの大衆小説の整理された文体で語られる。
一方、モリーの語りは自身の思考を忠実になぞるものであり読みづらい(意識の流れ)。
⇨ガーティの語りは誰かに伝えることを想定しているが、モリーの語りでは伝えることは特に想定していない。

・ガーティの語りでは多くの男性が登場するが、誰に対して言及しているかは比較的わかりやすい。
一方、モリーの語りでも多く男性が登場するが、主語・指示語が「彼」であり、誰の話か特定しづらい。
⇨処女ガーティにとっては一人一人の男性が特別な存在であるのに対し、
　”経験豊富”なモリーにとっては「彼」は複数人いる男性のうちの一人でしかない。

・第13挿話のガーティの語りでは実際のガーティの教養以上の語彙・表現力が用いられている可能性がある
(チャールズおじさんの原理)。
一方、第18挿話のモリーの語りでは等身大のモリーの語彙で語られる
(訳文は平仮名遣い、原文はスペル違いなど)。

第18挿話のトピック

・なぜ句読点がない語りが用いられるか

・解放者としてのモリー

・なぜ最後の挿話の語り手が女性なのか

・『yes』の意味するものは

解放者としてのモリーの意義を第13挿話と比較して考える。

解放者としてのモリー　-第13挿話との比較-

第13挿話の主要なトピック
・猥褻さ
・処女ガーティの自己検閲性

拙者、第13挿話資料より

なぜユリシーズは猥褻なのか　-なぜジョイスはエロティックな悦びに囚われたのか-

ユリシーズはノーラのための物語だった。彼の書いている本は－すべてを語ろうとしていた本は－初めて過ごした晩の記念だった。ジョイスがユリシーズの中で永遠の生命を与えた一日は、波止場を越えてノーラと歩いた日で、初めて二人きりで過ごした日だった。1904年6月16日。彼が原稿に書きつけた単語の一滴ずつが、その人目を避けた一日をより不滅なものにした。ユリシーズは彼の最後のラブレターだった。(P.189)

ジェイムズ・ジョイスがノーラ・バーナクルが交わしたエロティックな手紙は、近代文学のひそかな源流の一つだ。ここでジョイスは言葉そのもののエピファニーを体験したのだから。最も卑俗な言葉の魂が、書くことの究極の力は愛情と同じように作家の無力さをあらわにするなと気づかせた。(P.190)

猥褻な文章と切り捨てずそのやり取りに応じた妻ノーラのおかげでジョイスは作家として大成した。

問：なぜユリシーズは猥褻なのか
答：ジョイスは「猥褻さ」こそが個人の感情・内面を最も突き動かすことを見出したため。
　　また彼はその実践をダブリン－トリエステ間での妻ノーラとの手紙で行うことで偉大な作家へと大成した

・第18挿話ではより露骨で「猥褻」な描写が多く見られる。
・モリーの語りはジョイスと妻ノーラとの手紙の内容を読者に想像させる。

解放者としてのモリー　-第13挿話との比較-

第13挿話の主要なトピック

・猥褻さ

・処女ガーティの自己検閲性

小林広直氏　第13挿話発表資料より

「月経」という言葉は、ガーティの意識の流れにおいて無意識的に抑圧／抑制される(Repression / Suppression)

言うまでもなく、ブルームもまた「抑圧」と無縁ではない

あれがはじまると女は悪魔みたいになる。(*U*-△ 13.455)

Devils they are when that's coming on them. (*U* 13.822)

→しかし、ブルームは月経という言葉自体を使うことを己に禁止していない

あの斜視の娘のほうは痩せすぎだ。たぶん月経が近いんだろうな、気が立ってくるものらしいから。・・・・・今日あれになってる女がダブリンに何人くらいいるのかな？マーサとさっきの娘と。何かがあるんだ。月との関係。でもそれなら月が同じ形のとき女がいっせいに月経になるはずじゃないか？生れた時間できまるのかな。それともスタートは同時だがだんだんばらばらになるのか。モリーとミリーはときどき一致することがある。(*U*-△ 13.452-53)

That squinty one is delicate. Near her monthlies, I expect, makes them feel ticklish. . . . How many women in Dublin have it today? Martha, she. Something in the air. That's the moon. But then why don't all women menstruate at the same time with the same moon, I mean? (*U* 13.777-84)

・ガーティは意識的に性的な事柄への言及を避けている。一方、モリーは躊躇なく饒舌に語る。

・ガーティは処女であり、家庭内で母親的な役割をしている。これは男性が描く理想の女性像という側面がある。一方、モリーは不義の妻として家の中で不倫を致すことからその対極で描かれる。

第18挿話のトピック　-小結-

・なぜ句読点がない語りが用いられるか

・解放者としてのモリー

・なぜ最後の挿話の語り手が女性なのか

・『yes』の意味するものは

第18挿話では最も個人の内面に迫る「猥褻」な事柄を、
モリー自身の思考・言語に沿って赤裸々に語らせることで、新しい表現手法を確立した。

第18挿話のトピック

・なぜ句読点がない語りが用いられるか

・解放者としてのモリー

・なぜ最後の挿話の語り手が女性なのか

・『yes』の意味するものは

最後の語り手が女性である理由を第9、14、17挿話を用いて考える

なぜ最後の挿話の語り手が女性なのか –第17挿話との比較-

「●」再考
-第17挿話最後の一文-

どこへ？
●　　(U-Δ,17,275)

主人公ブルームが家に帰還し眠る時、ダブリンを巡るの1日の冒険が終わる。
「●」をピリオドと解釈する時、「ユリシーズ」という物語は第17挿話で1度完結する。
⇨第18挿話は第1～17挿話と切り離して考えることもできる。

なぜ最後の挿話の語り手が女性なのか –第14挿話との比較-

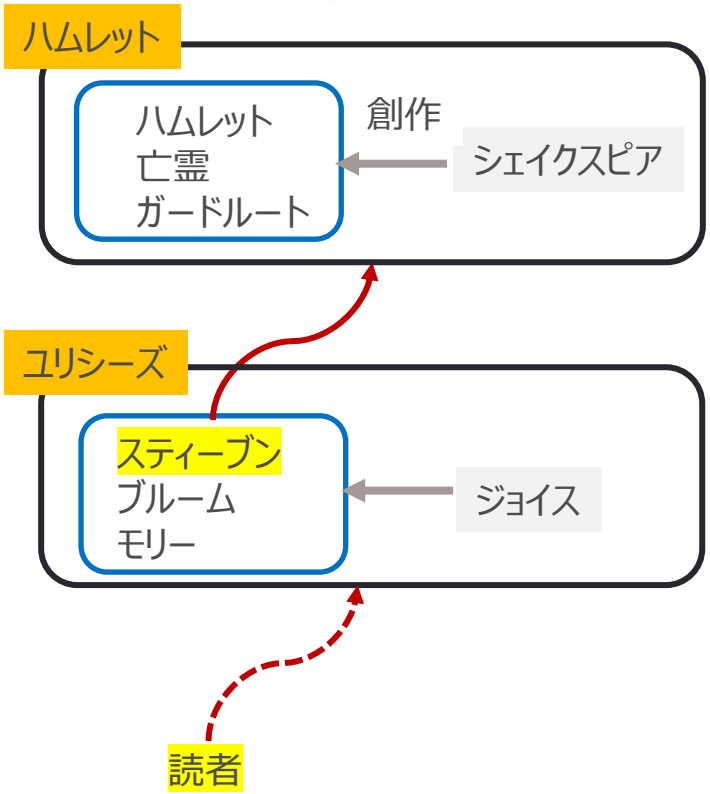
第14挿話の主要なトピック
・古代英語～現代英語のスラングに至るまでの多様な文体の使用。
⇨「生命」を「芸術」に掛け、 出産へと至る道を文体の変遷、難産を新しい芸術の生みの苦しみと説く。

第14挿話では文体の変遷を紹介しているが、「ユリシーズ」では全編に渡り、語りの実験が行われている。
⇨第1挿話～第17挿話での語りの変遷は新しい文学が生み出される過程とも捉えることができる。

第18挿話はこうしたジョイスの自身の試みを総括するという側面もある。

なぜ最後の挿話の語り手が女性なのか –第9挿話との比較-

■第9挿話の構図

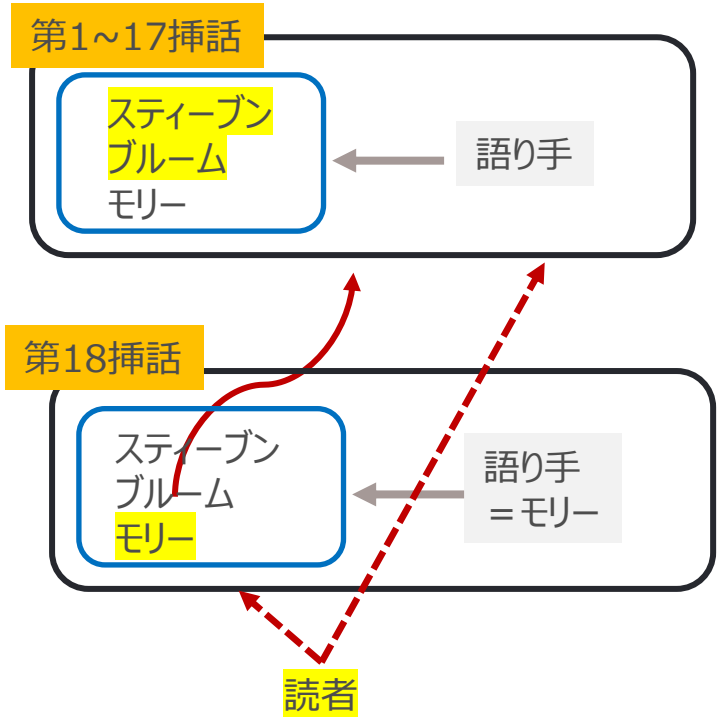


ハムレット＝ユリシーズ
シェイクスピア＝ジョイス
スティーブン＝読者
とした際に第９挿話は
入れ子構造・メタ・フィクションとしての様相を成している

なぜ最後の挿話の語り手が女性なのか –第9,14,17挿話との比較-

第18挿話を第1～17挿話と切り離し、それらを総括する挿話と考えた場合・・・

■第18挿話の構図



第18挿話では語り手＝モリーにより、これまでブルーム・スティーブンを中心としてきた男性目線での「ユリシーズ」に対して解釈が施される。

モリーの「男たち」への言及は単に小説内の出来事に対してだけでなく、男性中心の語りや物語に対して一石を投じる

モリーの存在により、読者は男性目線の第1～17挿話と女性目線での第18挿話という２つの側面で「ユリシーズ」を捉えることをできる。

第18挿話のトピック –小結-

・なぜ句読点がない語りが用いられるか

・解放者としてのモリー

・なぜ最後の挿話の語り手が女性なのか

・『yes』の意味するものは

最後の語り手であるモリーは第1～17挿話の解釈を行い、
これまで男性中心の物語であった「ユリシーズ」を批評する

第18挿話のトピック

・なぜ句読点がない語りが用いられるか

・解放者としてのモリー

・なぜ最後の挿話の語り手が女性なのか

・『yes』の意味するものは

『yes』の謎について第12挿話を用いて考える

『yes』の意味するものは　–第12挿話との比較-

・『yes』の一般的な使われ方は「肯定」を意味する。
・モリーは文中の要所、要所で自分や他者の思考・行為を肯定をする。

拙者、第12挿話資料より

内容

愛

愛です
侮辱や憎悪は。そういうのは本当の人生とは正反対なんだってことは誰だってわかりますよ。
ー何のこと？アレフは云う
ー愛です。ブルームは云う(*U*-Y 12. 555)

彼の語る「愛」とは？

他挿話に見る「愛」(いずれもスティーブンの独白)
ここで一人ぼっちなんだ。ねえ、すぐにいますぐ触ってよ。男なら誰しも知るあの一語はなんだっけ？(*U*-Y 3. 92)

母の死の床をトラウマとして引きずる彼は無性な寂しさを感じる

愛、そう。万人の知る言葉。愛は我々が何かを望むとき人に善きことを求める。(*U*-Y 9. 334)

スティーブンはそれが愛であると悟る。そしてその実現には他者への善行を要請されると説く

ジョイスの描く愛
スティーブンの「愛」→根底にあるのは母の愛＝全てを受け入れる「愛」
ブルームの「愛」→他者への侮辱・憎悪への対義語としての「愛」→あるがままの他者を受け入れ、尊重する「愛」

他者の存在を肯定しあるがままに受け入れる「愛」をジョイスは解こうとしたのでは

分断を乗りこえるのは「愛」。これは現代にも十分通じるテーマである

22

「ユリシーズ」における全面的な肯定、それは「愛」である。

『yes』の意味するものは　–第12挿話との比較-

「ユリシーズ」における全面的な肯定、それは「愛」である。
⇨つまり『yes』は『love』と同義ではないか。

挿話中モリーは『yes』を多用するがこれは彼女がありのままの生を肯定して生きていること、
そして彼女自身がこれまでに多くの男性を愛してきたことを意味する。

ここで一人ぼっちなんだ。ねえ、すぐにいますぐ触ってよ。男なら誰しも知るあの一語はなんだっけ？(*U*-Y 3. 92)
⇨男は皆、「愛」を求めている。惜しみない「愛」の応答、連鎖が最後の最後に女性であるモリーによって示される。

『yes』の意味するものは　–最後の「yes」が意味するものは-

最後の一文
そして彼の心ぞうはたか鳴っていてそしてyesとあたしは言ったyesいいことよYes。(U-Δ,18.388)
⇨モリーはブルームのプロポーズを思い出すことで彼の存在を再び受け入れ愛する。

ブルーム夫妻の愛の形
自分の不能が故に妻に別の男をあてがうブルーム。実際に不倫をしながらもブルームの優しさを噛み締めるモリー。
⇨一見歪に見えたとしてもお互いの存在を肯定し、受け入れるブルームとモリー。
　二人の間には確かに「愛」があり、「yes」を通じて二人は和解するのではないか。

ジョイスのラブレター
「ユリシーズ」とはジョイスの妻＝ノーラにあてたラブレターである(-「ユリシーズ」を燃やせ-の一文)。
だからこそ妻との初デートである1904年6月16日を舞台に設定したのである。
そしてその物語はノーラへのyes=愛の言葉によって完結する。

第18挿話のトピック　–小結-

・なぜ句読点がない語りが用いられるか

・解放者としてのモリー

・なぜ最後の挿話の語り手が女性なのか

・『yes』の意味するものは

『yes』は愛を意味する。「愛」は「ユリシーズ」の１つの主題であるとともに
最後のモリーの『yes』によってブルームとモリーは和解する

第18挿話のトピック　ーまとめ-

・なぜ句読点がない語りが用いられるか

・解放者としてのモリー

・なぜ最後の挿話の語り手が女性なのか

・『yes』の意味するものは

第18挿話のモリーの物語によって以下のことが達成された
・「猥褻」な事柄を赤裸々に語らせることで新しい文学の扉を開いた
・小説内で男性中心であった「ユリシーズ」の批評を行わせた
・女性の持つ「愛」の広さ、深さを説くとともに、ブルームと和解させる

最後に

第8挿話、ライストリュゴネス族を読んでいるときに婚姻届を出し、

第14挿話、太陽神の牛を読んでいるときに娘が生まれ、

第17挿話、キルケを読んでいるときに家を買い、引っ越しました。

気付けば人生の多くの節目で「ユリシーズ」が常に横にあり
それを読むこと、考えることは日常の一部でした。

南谷奉良さん、小林広直さん、平繁佳織さん
素晴らしい世界へご招待頂きありがとうございました。
そして３年間お疲れ様でした。